



第26回

地域おこし協力隊員が「杖ヶ藪展」

※2023年12月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべきところを指摘してください。

1 / 2

和歌山県高野町の杖ヶ藪地区つがやぶに奈良県から移住した地域おこし協力隊で書家の宇奈手侑子うなてさんが、地区の写真や映像、自身の書作品などを紹介する「書と映像による『杖ヶ藪展』」を高野山観光情報センター（同町高野山）で開いている。弘法大師が着いたつえからやぶができたと言われる由緒ある地だが、現在住んでいるのは宇奈手さん夫妻らわずかで、宇奈手さんは「杖ヶ藪などの点々とした村があって高野山が成り立ってきたことを知ってもらい、地域が絶やさないようにしたい」と願いを込める。

杖ヶ藪地区は高野山真言宗総本山金剛寺などがある町中心部から北東に約7キロ離れている。かつて

は林業が盛んで、位牌いはいの生産でも知られていた。町教委などによると、杖ヶ藪地区の人口は、1930年の町勢要覧に37世帯、189人と記録されているが、2015年の国勢調査では7世帯、9人に減少している。宇奈手さんらによると、畑作業などで和歌山県橋本市方面などから訪れている元住民もいるという。

移住のきっかけは、夫で笛奏者の毅たけしさんが高野山で行なわれたイベントに参加し、杖ヶ藪地区の空き家の所有者と知り合ったのがきっかけだった。「周りに人がおらず、自由に笛を吹くことができ、お大師様とも縁のある土地」（毅さん）と、まずは21年に毅さんが移り住んだ。その後、22年8月に

地域起こし協力隊となった宇奈手さんが合流し、書の腕前を活かして名所の看板などを製作してきた。同年11月には長男風介ちゃんが誕生した。

考えている。宇奈手さんは「歴史的にも民俗的にも深い地区なので、消えないでほしい」と話している。

今回の催しでは、宇奈手さんが寺社や神社の御朱印として書いた書や、09年に撮影された正月行事の写真、国土交通省が約20年前に地域で撮影した風景の映像など、地区にちなんだ品々が紹介されている。宇奈手さんが杖ヶ藪で初めて夜を過ごした時の気持ちを書いた「ところをものみこむ夜のしずけさ」などの書作品18点も展示される。毅さんは、正倉院に伝わる古代の笛を参考に製作した「古代尺八」などを演奏する。剛さんは「09年の写真から当時は住民がたくさんいたことが分かる」と地区の急激な変化に驚きを隠さない。

地区ではかつて、5カ所ほどの社で月4回、夕方に灯をともして邪をはらう行事が営まれていたという。2人はこれを復活させ、多くの人に足を運んでほしいとも